

シンポジウム

森・川・海のつながりを考える



話題提供

森林は、水源かん養機能や土砂流出防止機能等を有するとともに、河川を通じて豊富な栄養塩類等を漁場へ供給していることから、「森は海の恋人」というキャッチフレーズに代表されるように、豊かな森が豊かな漁場の保全に寄与しているところです。

このため、漁民の森づくり活動や、水産庁と林野庁の連携による漁場環境の保全に資する施策が実施されているなか、近年においては、魚礁への間伐材の利用による漁場環境の改善や間伐の促進等が図られているところです。

このようなことから、今回、漁業関係者による植樹活動の取組や間伐材を利用した木製魚礁開発の取組などにスポットライトを当て、7月12日(木)、東京・新木場の木材会館で「シンポジウム 森・川・海のつながりを考える」(主催：シンポジウム「森・川・海」実行委員会(全国森林組合連合会、(公社)国土緑化推進機構、(社)日本治山治水協会、(社)全国漁港漁場協会、(財)漁港漁場漁村技術研究所、(社)水産土木建設技術センター、全国漁業協同組合連合会、全国内水面漁業協同組合連合会、農林水産省(林野庁、水産庁))が開催されました。

冒頭、シンポジウム実行委員長である佐藤重芳全国森林組合連合会代表理

事会長から主催者挨拶があり、シンポジウムの趣旨、今年が国際協同組合年であることや、パネリストの紹介がありました。

続いて農林水産省から、皆川林野庁長官が挨拶に立ち、「シンポジウムの開催により、地域での活動を地道に繰り広げられてこられた方々の取組が一層力づけられ、国民に広く認識されることに繋がりますことを心より祈念いたします」と述べました。

シンポジウムでは、地域で活動に取り組んでいる海・川の漁業者、自治体の長、間伐材を使った魚礁の研究開発担当者から、それぞれ話題提供が行われました。

宮城県気仙沼市で漁業を営む畠山重篤さんからは、24年前から取り組んでいる気仙沼湾に流れ込む大川上流での植樹活動の事例のほか、東日本大震災により津波被害を受けた牡蠣養殖の復興状況や、国連からフォレスト・ヒーローズを受賞したエピソードが紹介されました。

北海道漁業協同組合の平賀由喜子さんからは、昭和63年から北海道で浜のお母さんたちが100年かけて100年前の自然の浜を取り戻そうを合い言葉に取り組んできた植樹活動を紹介し、地域全体の環境保全にもつながる取組

を展開していきたいとの報告がありました。

川の取組としては、天竜川漁業協同組合の秋山雄司さんから、静岡県浜松市を流れる天竜川の現状と取り組まれている様々な活動に関して報告がありました。

長野県根羽村^{ねば}村長の大久保憲一さんからは、「トータル林業」として木の搬出、ビルダー、施主に続く一貫した生産管理体制を構築していることや、矢作川上流にある根羽村が下流にある愛知県の自治体や企業から支援を受けて森林整備の推進していること、NPOと連携しながら水源地を守る活動を行っていることについて時代背景の移り変わりを交えて報告がありました。

間伐材を利用した魚礁については、福井県れいなん森林組合の本所稔基さんと(株)グロープの岡拓司さん、島根県隠岐の島の海中景観研究所の伊良部善久さんから、魚礁に間伐材を使用することにより森林整備に繋がることや、魚を集める効果やコストに関して報告がありました。

話題提供に続き、太田猛彦東京大学名誉教授をコーディネーターとして、各話題提供者に林野庁から古久保英嗣部長、水産庁から橋本牧部長を加えてパネルディスカッションが行われ

【プログラム】（敬称略）

■話題提供

- ①「森は海の恋人」
 畠山 重篤 （NPO法人森は海の恋人理事長）
- ②「お魚殖やす植樹運動」
 平賀由喜子 （北海道漁業協同組合女性部連絡協議会会長）
- ③「河川環境維持の取組」
 秋山 雄司 （静岡県天竜川漁業協同代表理事組合長）
- ④「水源地域の森林整備」
 大久保憲一 （長野県根羽村村長）
- ⑤「美しい日本の自然を守る木材増殖礁」
 本所 稔基 （福井県れいなん森林組合施業計画課長）
 岡 拓司 （(株)グローヴ代表取締役）
- ⑥「木製魚礁の整備」
 伊良部善久 （(株)海中景観研究所代表取締役）



パネルディスカッション

■パネルディスカッション

コーディネーター

太田 猛彦 （東京大学名誉教授）

パネリスト

上記の話題提供者及び

古久保英嗣 （林野庁森林整備部長）
 橋本 牧 （水産庁漁港漁場整備部長）



太田名誉教授



畠山重篤さん



平賀由喜子さん



秋山雄司さん



大久保憲一さん



本所稔基さん



岡拓司さん



伊良部善久さん



古久保部長



橋本部長



皆川長官



佐藤重芳会長

ました。
太田名誉教授からは、今から50年ほど前まで、日本の森林は荒廃し、今の途上国の森林と同じような状態にあり、大量の砂が山から流れ海まで運ばれていたことや、その後、懸命な造林により現在は、量的にはかなり豊かな森林となつていることなどが紹介されました。
林野庁の古久保部長は、日本の森林は、現在、先人の努力により最も豊かな状態にあり、これを活かし、守り、次世代に引き継いでいくことが重要と認識していると述べました。

水産庁の橋本部長は、山と海が連携して海の豊かさを取り戻していくことができないかと5年前より、水産庁の予算を使って森林整備を実施してきていることが紹介されました。
パネリストからは、森・川・海のつながりを考えるときには、流域を一体と考えて森を守りながら森林の資源を上手く使っていくこと、植えた木をきちつと管理していくこと、上流域と下流域の人達がお互いに理解して取り組んでいくことが大切だとの意見が出ました。
コーディネーターから、「森から川、

そして海へと流れていく関係性は、まだまだ知られていないことがたくさんあり、様々な分野、他の活動についてもご理解をいただきながら、その活動の長所、短所を理解し、流域ということを考え、町と村、漁村と山村が全て一体となつて連携を進めて行くことが望ましいと考えます。」とまとめがあり、満場の拍手とともに閉幕しました。
今回のシンポジウムは、林業、水産業はもとより学生など様々な方が参加され、熱心に視聴する姿が見られるなど、「森・川・海」に対する関心の高さがうかがわれました。